

地域の協力を得て理系大学がおこなう歴史を活かした町づくりの提案 ～江戸期廿日市宿を対象地域として～

広島工業大学 正会員 三好 孝治

1. はじめに

わが国においては、1970年代のころより、地域の歴史や文化に基づいた町づくりが盛んにおこなわれるようになった。このような状況の中で、本学環境学部地域環境学科の学生に江戸期廿日市宿の町並みを把握し、町並みイメージを3次元CGで作成する課題を与えた。この課題を通して学生は廿日市の歴史・文化を学び、それらを活かした町づくりについて考え、CADやCG等のIT技術を修得することができる。本学科は文理融合型の教育を目指している。理の教育面については充実した指導体制にあると言えるものの、文の教育面については十分とは言えないのが実情である。そこで、廿日市市郷土文化研究会や郷土史家の方々と定期的なワークショップやフィールドワークを開催し、学生に地域の歴史や文化を学ばせた。本稿では、その実践例を報告する。

2. 江戸期廿日市宿の把握

2.1 屋号から家業を知る

江戸期の廿日市には本陣がおかれ、西国街道に沿った宿場町として繁栄していた。江戸期の建物はほとんど残っていないが、往還や、小路などの道は現存しており、江戸期の宿場町の面影を残している。伝寛文年間(1661～1672)、正徳年間(1711-1715)、文化五年(1808)、といずれも江戸期に描かれた貴重な町屋絵図が伝わっており、江戸期の町の情報を得ることができる。

江戸期の廿日市宿はどのような町であったのか、そのイメージを、より具体的に得るための方法の一つは、絵図に書かれた屋号から家業を知ることである。町屋の屋号が記された絵図としては、前述の伝寛文年間のものと正徳年間のものがある。屋号には、容易に家業が推測できるものと、推測が難しいものがある。容易な例として商品名(紙屋、魚屋、米屋、材木屋)や職業名(鍛冶屋、塗師屋、大工、医者)がそのまま屋号になったものがあげられる。家業の推測が難しいものとして、地名を屋号にしたもの(伊予屋、のうみ屋、広島屋、岩見屋)があり、藤屋、菊屋、亀屋等も直接家業を特定できない

例である。そのうち、廿日市町史の記述や聞き取り調査から、宮屋、奈良屋など数軒の町屋の家業が判明した。現在、全屋号のうち約27%の商いの種類が明らかとなった。

2.2 屋号分布図による廿日市宿の解明

家業の解明においては、年代によって家業が変わることや、複数にまたがる場合などがあり、確定するのが難しい。しかし、家業が推測できた屋号別に色分けをして分布図を作成すると、材木屋が集中する地域、魚屋が集中する地域、木材加工業が集中する地域、宿屋が集中する地域などが明らかになり、おおまかな町の様子を掴むことができる。魚棚町は港から近く、新鮮な魚を商う魚問屋で賑わい、本陣周辺には武士が泊まる宿屋や旅籠が軒を連ねていた。西材木町に材木問屋が集中しており、その材木を使う桶屋もその付近に集中している。西材木町から可愛川へぬける須賀町の往還沿いには、「木工の町廿日市」を連想させる傘屋、ろくろ屋、籠屋などの木工職人が住んでいた。横小路や後小路は鍛冶屋、塗師屋などの職人の町だった。正徳年間絵図の屋号を調べることで、少しずつではあるが廿日市の町がイメージできるようになった。

3. IT技術の指導

3.1 町並みのCG化

正徳年間の絵図には、一軒一軒の町屋の屋号、表口、および入(奥行き)の寸法が「間」の単位で記載されている。文化五年の絵図は、家々の屋根の特徴として、瓦葺き、茅葺き、とが描き分けられ、建物の高さが判別できる。この2つの絵図から得られる情報を基に、廿日市宿の町並み景観を推測した。対象地域で唯一残る江戸期の町屋といえるものは岩根家である。江戸末期の慶応2年に建てられた。これをこの地域の町屋の典型的なモデルとし、家並みの景観を作成した。その他、非番所、うまや、2軒の町屋(城家と能勢家)などの想像図を作成した。

廿日市本陣の3次元外観図を作成するための資料は、

キーワード 地域との連携、町づくり、江戸期の絵図、屋号解明

〒731-5193 広島市佐伯区三宅2丁目1-1 広島工業大学工学部 TEL: 082-921-9011, FAX: 082-921-8979

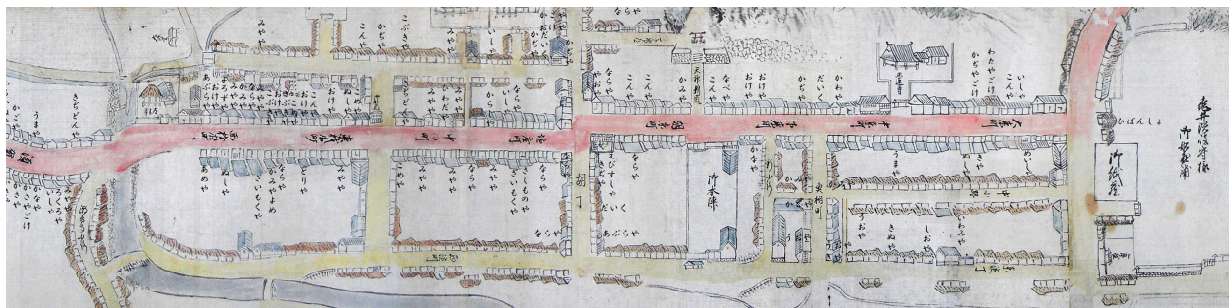


図1 屋号を書き入れた文化五年の廿日市町屋絵図

江戸期から伝わる間取り図と、正徳年間絵図に記された表口、入の寸法だけである。そこで、建物がほぼ完全な状態で保存されている岡山県旧矢掛本陣の1階部分の間取り図と屋根の稜線の向きとの関係を調べ、それを基に、廿日市本陣の3次元CGによる想像図を作成した。本陣やその周辺の町並みのCG化には郷土史家の助言や古い写真集などが役立った。また、この課題を通じて、学生はCADやCGの技術を学んだ。

3.2 GPSを用いた江戸期の町並み把握

文化五年の廿日市町屋絵図に描かれている道や寺社の多くが、今日とほぼ同じ位置にあることがわかった。そこでこの絵図を格納したPDA(情報携帯端末)を見ながら、実際に対象地域を歩くことにより、江戸期の町並みを把握できないかと考えた。そのためには、絵図と現在の地図の対応点を明らかにする必要があり、郷土史家とのワークショップでおおよその資料を作成し、後日、郷土文化研究会会員と共同で実施したフィールドワークで確認をおこなった。絵図中の街道を歩くという目的から、まず、当時の街道と現在の道路が一致する箇所を対応点とし、寺社、本陣、石橋などの目標物も付け加えた。幾何補正後の絵図に、家業が推定できた屋号89件を選んで絵図に書き入れた(図1)。その絵図を格納したPDAを携帯し、画面の絵図中の道をたどりながら現在の町を歩くことにより、材木屋、魚屋、宿屋が集中する地域など、地域の特色を掴むことができた。また、学生はGPS対応のPDAの操作方法を学んだ。

4. 歴史を活かした町づくりの提案

廿日市市都市計画課の職員と共に開催した2回のワークショップで、地域の歴史を活かした町づくりについて学生が提案した2例について述べる。主として広報活動を重視した内容になっている。a)回船問屋の寄進と伝わる常夜灯が天満宮の吊り鐘のすみに押しやられている。この常夜灯を祭りなどの特別な日に、明かりを灯し、廿日市商人のシンボルとして復活させる。b)廿日市港はかつて、北前船が寄港し、津和野藩の船屋敷があるなど海

上交通の要所であった。歴史のある港を整備して公園にし、当時を偲べるような案内板を設置する。

学生は廿日市の歴史を学び、町の歴史的価値を知ること、以上のような提案をおこなうことができた。

5. 地域との連携

本研究では、廿日市市教育委員会が所蔵する絵図の閲覧、撮影、市の都市計画に関する資料の提供など、地域の行政から協力を得ることができた。また、廿日市市郷土文化研究会による長年にわたる歴史研究の成果、特に伝寛文年間と正徳年間の両絵図の古文書を解読した資料の提供を受けた。研究に必要なフィールドワーク、聞き取り調査、資料収集の際には、地元を熟知した会員のバックアップは不可欠であった。廿日市の歴史に詳しい郷土史家と定期的にワークショップを開催し、学生の疑問に答えてもらった。地域に密着した調査活動を通じて、学生は地元の人々と触れ合い、市民センター等で開催される生涯学習フェスティバルなどに積極的に参加し、研究内容の広報活動をおこなった。

6. おわりに

全国に古い絵図が残されており、各地域には歴史を研究する団体が存在する。大学と地域が連携して若い世代に歴史や文化を教え、彼らが考えた町づくりの提案を地域に還元させる取り組みは、廿日市に限らず他の地域にも適用できる。地元の歴史を明らかにし、それを公表することは地域貢献にもつながるので、有効な教育手法として提案したい。今後、江戸期の町の把握と並行して、明治、大正、昭和、現代の地図をPDAに格納し、町の変遷がわかるフィールドワークを実施すれば、町の活性化に焦点をあてた新たな提案が期待できると考えている。

参考文献

- ・廿日市町史・資料編Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、廿日市町史編集室(1975～1981)。
- ・三好孝治、上嶋英機、森保洋之、青山吉隆、PDAを活用した江戸期廿日市宿の町並み把握の一手法、地理情報システム学会講演論文集、Vol18、283-286(2009)。